

吉峰寺

令和元年11月第1週放送

福井県の大本山永平寺から車で約三十分、同じ永平寺町に吉峰寺きつぼうじはあります。正式名称を老梅山吉峰寺ろうばいざんきつぼうじと言います。今から千三百年程前、日本三霊山の一つ、白山はくさんを開いた修験道しゅげんどうの高僧、泰澄たいちようだいし大師だいしが開いたとされるお寺です。

このお寺に寛元元年かんげん（一、二四三年）の夏、当時この地の地頭の職はたのよしげこうにあった波多野義重公の招きを受け、道元禅師は京都から弟子共々移られました、当時、大仏寺と名付けられた、後の永平寺が完成するまでの間とうりゆう逗留とうりゆう留するためであったと言われていいます。

その間、約一年とわずかな期間でしたが、この吉峰寺において道元禅師は『正法眼蔵』全体の約三分の一にあたる、三十巻余りを説かれたと言われていいます。その当時は質素な伽藍がらんが残っていただけであったようです。吉峰寺の厳しい自然環境のもとで、道元禅師の思想は大いに成熟し、優れた著述が多く生み出されました。特に当時、都であった京都から越前の地に移ったことで、修行僧を中心とした教団のあり方や、坐禅を中心とした修行方法に対する考察が深められていきました。

例えば坐禅の実践の要点を纏めた『正法眼蔵』「坐禅儀」の巻が示されています。また現在でも吉峰寺の本堂の裏手には道元禅師が坐禅を組まれたとされる坐禅石せきも残されており、当時の坐禅のお姿が偲べれます。

またこの吉峰寺で説かれた『正法眼蔵』「梅華」の巻の最後には「雪深き事三尺余り、大地は果てしなく真っ白に染め上げられている」と記されています。深い雪に閉ざされた中で、お師匠様である如浄禅師との思い出を辿りながらの著述の日々は、道元禅師にとって暖かい春の

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

訪れを心待ちにする日々でもあったのでしょう。それはお釈迦様の教えになぞられた、梅の名と共に吉峰寺の山号、老梅山ろうばいざんとして今に伝えられています。

現在の吉峰寺は明治三十五年、道元禅師ろっびやくごじゅつかいの六百五十回忌に、田中佛心たなかぶつしん老師を中心に再建され、平成十四年、七しち百五十回忌には大規模な修繕が施され、本堂、開山堂くり、庫裡うんすいを中心に雲水が日々の修行を重ねています。

山の頂にある吉峰寺は、十五分程の坂道を登ったところにあります。この坂は後に永平寺三代目の住職てつうぎかいとなる徹通義介禅師が台所の責任者である典座てんぞを務めていた頃、毎日麓に水を汲みに出かけたことから「徹通坂てつうざか」と名付けられています。現在はお寺の近くまで車道が通じていますが、当時を偲んでこの坂を上っての参拝も出来ます。この十一月には道元禅師を偲び、開山忌も行われます。大本山永平寺ご参拝の折には、この吉峰寺へも足を延のばしてみたいかがでしょうか。

— 終 —